

米 書 評

安芸皎一・多田文男 監修
 浅井辰郎・徳平 淳・金子 良・
 山本荘毅・高橋 裕 編集

水資源ハンドブック

書 評 者
 石 原 安 雄*

今日、水害に対してなお未解決の問題が多く、一方いちじるしい経済発展によって需要水量が急増し、また新しい水需要を生じて、必要水量の確保、治水利水ならびに利水相互間の競合や副次的な公害などの重要問題が山積している。この時期において、広い視野にたった本書が刊行されたことは誠に意義深いものがある。今日の水問題は、理学、工学、農学などの各分野に関係しており、さらに人文社会上の問題をも含んでいるので、水に関する十分な科学的知識を基礎として総合的に考究して、初めて解決することができる課題である。すなわち、水資源に関する問題解決には、従来の専門分野にとらわれない総合的な科学の結集が必要である。

本書は水資源について今日の課題を整理し、水問題の解決にひとつの指針を与える糧となることを目的として、安芸皎一、多田文男の両氏の監修のもとで、35名が分担執筆し、浅井辰郎、徳平 淳、金子 良、山本荘毅、高橋 裕の5氏によって編集されたハンドブックである。

内容は4編に分かれており、1. 総論(6ページ)では、今日の社会における水資源の意義と問題点を指摘し、問題の把握の仕方について論述している。2. 水の存在(196ページ)においては、地表水と地下水とに分けて、水気象から沿岸水に至る間の広範な水文学上の知識を記述し、3. 水の調査、取水(83ページ)では、地表水の流量、水質および水温の調査方法と問題点を述べるとともに、地下水の探査法とその取水上の問題点につ

* 正会員 工博 京都大学教授

いて記している。以上の2編は自然科学としての水文学に関するものであって、基礎編ともいふべき部分である。4. 水の利用と災害(256ページ)は応用編ともいふべきもので、3部に分けられている。まず、産業と水(170ページ)の項では、農業、工業、発電および都市における水利用の実態を豊富な実例をもって示すとともに、全国的な標準値や各種の問題について述べ、利用の便をはかっている。災害(98ページ)の項では、水資源問題に関係する治水、地すべり、山崩れ、地盤沈下、海岸防御、水質汚濁、農地保全、森林保全の問題について概説し、新しい技術への動向(88ページ)の項においては、人工降雨、蒸発抑制、海水の淡水化、廃水の再利用、人工地下水、水温調節といった新しい問題について実例をもって説明し、将来の見通しなどについても述べられ、水資源開発に対する新しい技術開発への意欲を示している。最後に主要な参考書、事項・人名索引、および資料編が付されている。

以上のように、内容は非常に広い範囲にわたり多くの知識が集約されておいて、水資源の問題を取り扱ったハンドブックとして画期的な書といふことができよう。また本書の前半に記述されている知識は、水文学を志す研究者にとってもよき参考書であり、全般を通じて水資源に関係する専門家に限らず、これに関心のある人々に正しい知識を与えるにも恰好のハンドブックである。しかしながら一言苦言を呈するならば、水資源の問題が総合的な科学の結集によってはじめて解決されることを思うとき、後半に記されているいろいろの実際上の問題を、前半の水文学上の知識をどのように利用して、いかに調和させていくかという課題の記述に欠けている点が惜しまれる。また本書のはじめにも述べられているが、前半の水文学上の知識についてアメリカ等からのじか輸入のものがかなりあり、これはわが国のこの分野における学問の遅れを示すもので、現在行なわれようというユネスコの国際水文学十年計画を契機として、国際協力のもとでわが国の水文学が飛躍的に進展し、水資源の開発問題にも役立つことを期待してやまない次第である。

朝倉書店刊、A5判・659ページ、定価 3800円

新 刊 目 録 (次ページ下段に続きます)

編集記者名	書 名	判 型	ページ数	出 版 社	定 価	記 事
日本学術会議 第五部編	全国工学研究者 要覧	B5	494	日刊工業新聞社	3800	国際競争のはげしい今日、学界、産業界を問わず工学研究者があげて協調しなければならないとして、4268名の工学研究者を下記の分類で収録したものである。 本冊に収録された分野は、学界と官公立研究機関関係者のみであるが、代表的な工学研究の資料として利用できる範囲は広いと考えられる。 (大分類) 応用物理学、機械工学、電気工学、造船学、土木工学、建築学、鉱山学、金属工学、応用化学 (中分類) 大学、大学付属研究機関、官公立の研究機関 (小分類) 氏名を五十音順で登載